3.11 ソレカラ

～障害者・福祉職員の「あの日」と「ソレカラ」～

◎立身憲一（たつみ けんいち）さん（男性／当時60代・視覚障害）

障害者も健常者も、災害への備えは同じ。いろんな所とつながっておくことが大切。

― 自宅内にあるマッサージ室 ―

― 北上町の自宅跡と立身さん ―

自宅再建

震災から5年を経て、故郷石巻に戻る。新居に慣れるまで一苦労だった。

仙台での5年間の生活を経て、立身さんは2016年に石巻に戻ってきました。新たな土地に新居を建て、新生活を始めるためです。暮らし始めた頃は、新居が広いため、室内で方向が分からなくなったりしたことがありました。また、引っ越しは第三者による搬入だったため、どこに何があるのか分からず、後から自分で体をあちこちにぶつけながら配置し直した、という苦労があったそうです。

震災後

障害者に支援する人が増えたと実感。周囲の理解と支援に感謝する日々。

立身さんは今、横浜や仙台で活発に行動していた時の経験を活かそうと、震災前より外に出る機会を増やしています。その中で感じているのは、屋外で健常者に声をかけてもらう機会が増えたということです。先日も、電車に一人で乗っていた時、乗務員に声をかけられました。降車駅を伝えると、その駅の職員に連絡して降車の支援をしてくれたといいます。また別な時は、乗客に声をかけられ、扉の開閉ボタンを押してくれた人もいました。「駅の職員さんはもちろん、周りの方にも声をかけてもらえると大変ありがたいです」と、立身さんは話しています。

課題

視覚障害者を支援したい！当事者だから分かる、きめ細やかなサポートを目指す。

震災後、行動の幅が広がり活発に活動してきた立身さんは、今、ある思いの実現に向けて奔走しています。それは、石巻地区で視覚障害者のための支援をしたい、ということです。そのひとつは、視覚障害者の就労支援です。視覚障害者の就労は難しい、といわれているのが一般的です。しかし仙台では、視覚障害者を対象とした障害者就労支援事業所で、点字名刺や封筒作りの作業が行われています。そうした作業を自分たちもできないか、と考えているのです。

さらにもうひとつ実現したいのが、視覚障害者向けの情報ネットワークの構築です。石巻地区の視覚障害者の中には、視覚障害者福祉協会等を利用せず、さまざまな支援が受けられない方もいます。そういった方にも、有益な情報を提供することが目的です。「外に出てくるのが苦手な人でも、例えばプレクストーク（視覚障害者向けの音声録音・再生機）を活用すればいい。でも、それを役所に頼んで手配するっていうサービスを知らない人もいる。そういった細かい情報共有の仕方を考えていきたい」と立身さん。そのために、行政や社会福祉協議会と協力しながら、実現の道を模索していきたいと考えています。

さらに今後の課題として考えているのは、ボランティア団体とのつながりです。震災後、石巻にはたくさんのボランティア団体ができました。そうした人々と障害者がつながることで、新たな地域社会が生まれるのではないか。立身さんは、復興が進むこれからの石巻に期待しています。